

## 日本語版 Paranoia Checklist の作成および信頼性・妥当性の検討

山内 貴史

東京大学大学院総合文化研究科  
日本学術振興会特別研究員

須藤 杏寿

東京大学大学院医学系研究科

丹野 義彦

東京大学大学院総合文化研究科

妄想は、統合失調症の代表的な症状である。様々な妄想の主題の中で、最も頻繁にみられるのが被害妄想である。被害妄想は、“自分が悩まされている、追跡されている、だまされている、見張られている、あるいは嘲笑されているという確信”と定義される (American Psychiatric Association, 2000 高橋 他訳, 2002)。

近年、被害妄想と、人から笑われているといった健常者にもみられる被害妄想的な観念は、連続的な現象として捉えられている (Freeman, Garety, Bebbington, Smith, Rollinson, Fowler, Kuipers, Ray, & Dunn, 2005)。本研究では、Freeman et al. (2005) で扱われている、健常者にみられる被害妄想的な観念を被害妄想観念と定義する。

被害妄想観念の先駆的研究として、Fenigstein & Venable (1992) は、健常者のパラノイア傾向 (他者の思考や行動が自分に向けられたものだと、誤解もしくは過大視する傾向) を測定するパラノイア尺度 (the Paranoia Scale) を作成した。これまで、被害妄想観念の測定にはこのパラノイア尺度が用いられてきた (Freeman et al., 2005)。しかし、近年、パラノイア尺度を用いて被害妄想観念を測定することの問題点が指摘されている。

まず、項目の適切さの問題である。パラノイア尺度には、被害的な内容とは言い難い項目が多数含まれている (Freeman et al., 2005)。次に、多次元的測定の問題である。Peters, Joseph, & Garety (1999) は、妄想患者と健常者の双方を対象に妄想的観念尺度を測定し、患者の妄想は健常者よりも苦痛度が強く、心的占有度 (考える頻度) が高かったと報告している。そのうえで、Peters et al. (1999) は、妄想的観念を多角的に詳細に捉えること、および健常者の妄想的観念と臨床群の妄想との相違を明らかにすることの重要性を指摘している。しかし、パラノイア尺度は、考えがどの程度自分に当てはまるのかのみを尋ねており、観念の苦痛度などは考慮されていない。

そこで、Freeman et al. (2005) は、項目の適切さおよび多次元的測定というパラノイア尺度の問題点を克服し、健常者の被害妄想観念を測定する質問紙 the Paranoia Checklist を作成した。the Paranoia Checklist は、イギリスの大学生を対象に高い信頼性および妥当性が確認されており (Freeman

et al., 2005)、健常者の被害妄想観念の測定に適切な質問紙であると考えられる。

以上を踏まえ、本研究では、健常者の被害妄想観念のアクセスメント・ツールとして、the Paranoia Checklist の日本語版を作成し、その信頼性および妥当性を検証することを目的とする。

### 方 法

#### 調査対象

大学生 120 名 (男性 70 名, 女性 50 名, 平均 20.60 歳, SD51.92) を対象に質問紙調査を実施した。

#### 質問紙

1. 日本語版 Paranoia Checklist (the Japanese version of Paranoia Checklist: JPC): 原著者の了解を得て、第一著者が日本語訳を作成した。バックトランスレーションの結果を踏まえ、第一・第二・第三著者が原尺度との内容の整合性を確認し、18 項目からなる JPC 原尺度を構成した。各項目に示すような観念に対し、頻度 (どのくらい頻繁に考えるか)、確信度 (どのくらい強く確信しているか)、苦痛度 (どのくらい苦痛か) の 3 つの次元について、1-5 の 5 件法で評定を求めた。得点が高いほど、頻度、確信度および苦痛度が高いことを示す。

2. パラノイア尺度 (丹野・石垣・大勝・杉浦, 2000): The Paranoia Scale (PS; Fenigstein & Venable, 1992) の日本語版であり、20 項目からなる。各項目について、“全く当てはまらない”から“かなり当てはまる”までの 5 件法 (1-5) で評定を求めた。20 項目の合計点を算出し尺度得点とした。

3. Peters et al. Delusions Inventory (PDI; Peters et al., 1999) 日本語版 (山崎・田中・森本・山末・岩波・丹野, 2004) より、被害妄想観念を測定する 2 項目を採用した。観念の体験の有無について、“はい”“いいえ”の 2 件法で回答を求めた。

### 結 果

JPC の 18 項目の総得点と各項目得点との相関係数を算出した。相関係数は、頻度については  $r=.26$  から  $.85$ 、確信度については  $r=.56$  から  $.82$ 、苦痛度については  $r=.47$  から  $.80$

Table 1 JPC の因子分析結果

	項目	因子負荷量
8	他人が私に対して敵意を抱いているだろう。	.85
2	私についての悪い評判が広まっているかもしれない。	.78
9	私は陰で悪口を言われている。	.78
10	知人が私に対して悪意を持っている。	.78
11	私は誰かが私に恨みを抱いているのではないかと疑っている。	.76
7	見知らぬ人や友人たちが私を批判的な目で見ている。	.74
6	他人がそれとなく私について話し合っている。	.66
16	私は他人からの脅威にさらされている。	.66
15	他人が私のことを笑っている。	.63
1	私は他人に対して用心している必要がある。	.56
5	他人が私を困惑させようとしている。	.52
13	知らない人が私に対して悪意を持っている。	.51
4	私は監視もしくは尾行されているかもしれない。	.51
12	他人は機会さえあれば私を傷つけようとするだろう。	.50
3	他人はわざと私を苛立たせようとする。	.49
14	私に対する陰謀があるかもしれない。	.48
18	私の行動や考えは他人によってコントロールされているだろう。	.42
17	私についての暗号文が新聞・テレビ・ラジオで報じられているのがわかる。	.26

の間であった (いずれも  $p < .01$ )。頻度において、相関係数の低い項目 (項目 17;  $r = .26, p < .01$ ) が 1 項目みられた。ただし, Freeman et al. (2005) との項目の一致性を重視する観点から, この項目も JPC に含むこととした。

次に, 体験頻度のデータに基づき, 主因子法による因子分析を実施した。固有値は 7.53, 2.02, 1.17, 1.05 … と変動した。第 1 固有値と第 2 固有値の間の変化が大きいため, 相関行列ではほぼ全ての値が有意な正の値を示したことなどを考慮し, JPC は 1 因子構造であると判断した (Table 1)。1 因子による説明率は 41.87% であった。なお, 性別に因子分析を実施したところ, 男女ともに 1 因子構造が認められた。

JPC の各次元について, 18 項目の Cronbach の  $\alpha$  係数を算出した。その結果, 頻度は  $\alpha = .91$ , 確信度は  $\alpha = .94$ , 苦痛度は  $\alpha = .94$  と, いずれも十分な値が得られた。以上の結果を踏まえ, JPC の各次元について, 18 項目の得点を総計し各尺度得点とした (Table 2)。JPC のいずれの尺度得点についても性差は認められなかった。

次に, JPC の収束的妥当性を検討するため, JPC の各尺度得点と PS 得点との相関係数を算出した。その結果, 頻度 ( $r = .69, p < .01$ ), 確信度 ( $r = .57, p < .01$ ), 苦痛度 ( $r = .47, p < .01$ ) のいずれにおいても, PS 得点と有意な正の相関が確

Table 2 JPC の各尺度の基本統計量

	平均	SD	$\alpha$
頻度	29.15	10.30	.91
確信度	29.31	11.02	.94
苦痛度	30.50	12.53	.94

認された。また, PDI の 2 項目について, 各項目の体験の有無で回答者を二分した。項目 1 “あなたは何らかの方法で迫害されているように感じたことがありますか” については, “はい” と回答した者の方が, JPC の各尺度得点が高かった (頻度:  $t[118] = 4.19, p < .001$ ; 確信度:  $t[118] = 3.64, p < .001$ ; 苦痛度:  $t[118] = 4.23, p < .001$ )。項目 2 “あなたはあなたに対する陰謀があるように感じたことがありますか” についても, “はい” と回答した者の方が, JPC の各尺度得点は高かった (頻度:  $t[118] = 4.76, p < .001$ ; 確信度:  $t[118] = 4.79, p < .001$ ; 苦痛度:  $t[118] = 3.86, p < .001$ )。

## 考 察

本研究の目的は, 健常者の被害妄想観念を測定する質問紙 the Paranoia Checklist の日本語版を作成し, その信頼性および妥当性を検証することであった。

本研究で作成された JPC は, 単に観念の有無だけでなく, 苦痛や確信の程度を多次的に把握することが可能である。また, JPC の各項目は, 被害妄想的な考えや疑念という内容でほぼ統一されており, Fenigstein & Venable (1992) のパラノイア尺度と比較して被害妄想観念の測定により適切な内容となっている。西欧文化圏では, 何らかの陰謀があるのではという内容の疑念が顕著にみられることが指摘されているが (Harper, 1994), JPC の項目の大半は他者の評価や批判に敏感な青年期の大学生が日常的に体験するような被害的な考え (e.g., 悪口を言われている) である。よって, JPC はわが国の大学生にも十分適用可能であると考えられる。

JPC の各尺度の  $\alpha$  係数は, 十分に高い値であった。よって, JPC は十分な信頼性を備えていると考えられる。また, JPC の各尺度得点と PS および PDI 得点との関係から, JPC の収束的妥当性は概ね確認されたといえるであろう。以上の結果を踏まえると, JPC はわが国の健常者の被害妄想観念をアセスメントするツールとして, 一定の信頼性および妥当性を備えていると考えられる。

ただし, 信頼性については, 今後は再検査法による検討が望まれる。因子分析の結果, 因子負荷が低い項目 (項目 17) がみられたが, これは当該項目の得点分布が低得点側に大きく偏っていたことが理由であると考えられる。本研究はサンプル数が少ないため, 今後, どのような項目の除外なども含め, 追加調査を実施し検討を重ねる必要がある。また, 本研究では JPC の収束的妥当性が示されたのみであり, 今後妥当性についてさらに検討していく必要がある。今後, 被害妄想を持つ患者に対しても JPC を実施し, 健常者の被害妄想観念との相違点を明確化していくことで, 被害

妄想研究に新たな知見をもたらすことができると考えられる。

#### 引用文献

- American Psychiatric Association (2000). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders*. 4th ed. text-revision. Washington, D.C.: American Psychiatric Association. (高橋三郎・大野 裕・染矢俊幸 (訳). DSM-IV-TR 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院)
- Fenigstein, A., & Vanable, P. A. (1992). Paranoia and self-consciousness. *Journal of Personality and Social Psychology*, **62**, 129-138.
- Freeman, D., Garety, P. A., Bebbington, P. E., Smith, B., Rollinson, R., Fowler, D., Kuipers, E., Ray, K., & Dunn, G. (2005). Psychological investigation of the structure of paranoia in a non-clinical population. *British Journal of Psy-*

*chiatry*, **186**, 427-435.

- Harper, D. (1994). Histories of suspicion in a time of conspiracy: A reflection on Aubrey Lewis's history of paranoia. *History of the Human Sciences*, **7**, 89-109.
- Peters, E. R., Joseph, S. A., & Garety, P. A. (1999). Measurement of delusional ideation in the normal population: Introducing the PDI (Peters et al. Delusions Inventory). *Schizophrenia Bulletin*, **25**, 553-576.
- 丹野義彦・石垣琢磨・大勝裕子・杉浦義典 (2000). Fenigstein らのパラノイア尺度の信頼性 このはな心理臨床ジャーナル, **5**, 93-100.
- 山崎修道・田中伸一郎・森本幸子・山末英典・岩波 明・丹野義彦 (2004). Peters et al. Delusion Inventory (PDI) 日本語版の作成と信頼性・妥当性の検討 臨床精神医学, **33**, 911-918.

— 2006.11.7 受稿, 2007.3.7 受理 —

## Reliability and Validity of the Japanese Version of Paranoia Checklist

Takashi YAMAUCHI<sup>1,2</sup>, Anju SUDO<sup>3</sup> and Yoshihiko TANNO<sup>1</sup>

<sup>1</sup> Graduate School of Arts and Sciences, The University of Tokyo

<sup>2</sup> Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science

<sup>3</sup> Graduate School of Medicine, The University of Tokyo

THE JAPANESE JOURNAL OF PERSONALITY 2007, Vol. 16, No. 1, 114-116

The purpose of this study was to develop Japanese version of Paranoia Checklist (JPC), in order to assess persecutory ideation in a non-clinical population. One hundred and twenty undergraduates completed JPC, the Paranoia Scale, and Peters et al. Delusions Inventory (PDI). Results revealed that JPC had one-factor structure and high internal consistency. JPC scores had positive correlations with scores of the Paranoia Scale and PDI. The results of the present study suggested that JPC had high reliability and validity as a measure of persecutory ideation.

**Key words:** persecutory ideation, Paranoia Checklist, multi-dimensional assessment, reliability, validity